

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 74

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

福岡大学における 医学研究の 倫理審査委員会の変遷

福岡大学病院臨床研究支援センター 野田 慶太

人を対象とする研究においては、学問の自由の保障と同時に、研究倫理の遵守が求められる。国は法律や倫理指針で研究の規制を行っているが、これらは1964年の世界医師会総会で採択されたヘルシンキ宣言を拠り所としている。ヘルシンキ宣言は、独立・透明性を有する倫理審査委員会についても規定しており、研究開始前の研究計画書の意見・承認や研究計画の修正に対する審議・承認などの業務が委ねられている。本稿では、福岡大学における倫理審査委員会の移り変わりについて概説する。

福岡大学においては、福岡大学医に関する倫理委員会規程が1986年6月1日に施行された。その第1条には、「本学の医学部及び病院に所属する教育職員が医学系の研究を行うにあたり、その内容・方法等についてヘルシンキ宣言(1964年第18回世界医師総会で採択、1975年第29回東京総会で改訂)の趣旨に沿い審査することを目的とする。」と記載されている。

一方、医薬品として国の承認を得るために行われる臨床試験(治験)に関する法律である「医薬品の臨床試験の実施の基準に関する省令(平成9年3月27日、厚生省令第二十八号)」の治験審査委員会の条項には、「実施医療機関の長は、治験を行うことの適否その他の治験に関する調査審議を次に掲げるいずれかの治験審査委員会に行わせなければならない。」と記載されており、2005年4月1日、福岡大学病院治験審査委員会規程および福岡大学筑紫病院治験審査委員会規程が施行された。

その後、福岡大学の病院における臨床研究等の審査を福岡大学医に関する倫理委員会から両病院の治験審査委員会へ正式に移行させるため、それぞれの委員会規程を2009年4月1日に福岡大学病

院臨床研究審査委員会規程および福岡大学筑紫病院臨床研究審査委員会規程へと改めた。この時点で、医学研究^{*1}の倫理審査を行う委員会が3つになった。研究の審査を担当する委員会、研究対象者(被験者)候補のフィールド(存在場所)によって区分した。

厚生労働省は、2014年度の「倫理審査委員会認定制度構築事業」で2015年3月末までに全国で9か所を認定した。これは、欧米並みの倫理審査の人員構成などの高い水準を求める「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(2015年4月1日、施行)」に対応するためである。福岡大学病院臨床研究審査委員会も申請を行ったが、一般の委員および外部委員が存在しないというコメントで認定されなかった。

福岡大学病院臨床研究審査委員会の構成委員を規定している条項では、「本院と利害関係を有しない者のうちから病院長が推薦し、診療部長会の議を経た者」となっており、当該委員は福岡大学の医学部・病院以外の教職員となっていた。同委員会は、治験の審査も行うが、法的構成委員の要件(①委員のうち、医学、歯学、薬学その他の医療又は臨床試験に関する専門的知識を有する者以外の者が加えられていること。②委員のうち、実施医療機関と利害関係を有しない者が加えられていること。③委員のうち、治験審査委員会の設置者と利害関係を有しない者が加えられていること。)は満たしている。しかし、認定に際しては、福岡大学病院は福岡大学の所属研究機関であり、福岡大学の医学部・病院以外の教職員は、福岡大学病院で実施される研究においては利害関係を有しているとみなされたようである。

その後施行された「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の倫理審査委員会の構成要件は、「倫理審査委員会の設置者の所属機関に所属しない者が複数含まれていること。」となっている。「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針ガイダンス(平成27年3月31日一部改定)」では、「倫理審査委員会の設置者の



所属機関に所属しない者に関して、例えば、附属病院を有する大学において、病院長や医学部長が倫理審査委員会の設置者となっている場合は、その倫理審査委員会の設置者の所属機関はそれぞれ当該病院、医学部であり、その大学で当該病院、医学部に所属しない教員・職員（以下、外部委員という。）であって、それら機関と業務上の関係がない者であれば外部委員としてよい。」と記載されており、福岡大学の病院長が設置した臨床研究審査委員会は医学系研究^{※2}の審査においても問題がないことになる。つまり、倫理審査委員会認定制度の判定基準と医学系研究の倫理指針の公的解釈とに矛盾が生じることになる。

一方、福岡大学医に関する倫理委員会の場合、規程には設置者名が明記されていないが、設置者は福岡大学長と読み取れるため、規程上学外委員が任命されていないことから医学系研究の倫理審査ができない状態となった。そこで、医学系研究の倫理指針に定める権限・事務を委任されている医学部長の発案で、

3つの倫理審査委員会を統合し、医学系研究の倫理審査が可能な、質の高い倫理審査委員会の設立を目指した。

福岡大学病院および福岡大学筑紫病院の臨床研究審査委員会での治験以外の医学研究の審査を福岡大学医に関する倫理委員会に移行させた福岡大学医に関する倫理委員会規程に改訂し、2016年9月23日に施行した。その際、福岡大学医に関する倫理委員会の設置者を医学部長とし、福岡大学とは無関係な方を委員として迎え、2016年10月より毎月40件弱の医学研究の倫理審査を行っている。

今後も研究倫理は厳しさを増すと考えられるが、倫理審査委員会の一般の立場の委員や非医学系委員の方々の意見を踏まえながら、倫理性の高い、優れた医学研究が実施されることを希望する。

※1 医学研究とは、厚生労働省のホームページ（<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/kenkyujigyou/i-kenkyu/>）で指針が示されている研究

※2 医学系研究とは、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」で定義される研究

新「福岡大学医に関する倫理委員会」に寄せて

医学系研究・生命医療倫理部門

今泉 聡



本稿では、最近の研究倫理審査の流れから将来の展望まで、私見を含め述べさせていただきます。

新しい治療法や技術、新薬の効果などをみる臨床研究の実施には、様々な制約やリスクが伴います。それから逸脱してしまえば、例えば、群馬大学で特定機能病院が取り消しになるといった重大な事例も発生しています。臨床研究を行うにあたり、倫理指針に対する医療現場の対応も難しくなっています。高難度の新規医療技術を使う臨床研究一つとっても、インフォームドコンセントのあり方、手術の術者の技量や指導體制まで含めた医療安全に関する基本的な仕組み、どこまでが診療行為でありどこから臨床研究となるのか、倫理指針の遵守をどのようにやっていくか、など様々な検討が必要です。つまり臨床研究とか高難度の診療技術の運用に関して、倫理的な問題に悩む場面が多くなっています。また研究計画書の作成でも、倫理的な側面の他、個人情報の保護、UMINなどの公開データベースへの登録なども含め、要求される事項が厳しくなっています。

全国の大学では、倫理体制の適正な運用は現場の医療スタッフや教職員の個人的な努力だけではどうにもならないとの危機感から、臨床研究支援の体制整備が喫緊の課題として挙げられています。大学が本腰を入れて倫理体制及び臨床研究支援体制の整備に向かわないと、将来的に大学の本質である研究教育能力が衰退する可能性がある、とまで言われています。そこで全国の大学

では、実際に医師主導臨床研究・治験を行うことにより優秀な人員を育て、新しい倫理指針への体制整備を進めています。ところが、医師主導臨床研究・治験ではこれまでの「臨床試験を実施する」という従来の役割に加え、企業が行ってきた企画・立案・総括という新たな責務も負うことになります。例えば、標準業務手順書の作成、薬事、データマネジメントや生物統計、解析、臨床研究コーディネーター（CRC）、モニター等など必要な人材への教育、COIマネジメントなどです。また、多施設共同臨床試験を行う場合には、複数の医療機関のスタッフが関与するため、情報の伝達・共有など多施設間を調整する業務も発生します。

さらには、臨床研究およびゲノム解析研究の指針改正や近い将来成立が予想されている臨床研究法案など、大きな変革の波も押し寄せています。このように、適正な臨床研究の実施に当たっては、倫理面に対する知識や考え方がどんどん必須となっており、研究にとどまらず医学生教育への徹底なども必要となってきました。このような中、本学はどのような方向へ向かっていくのか、検討していく課題は多岐にわたります。医療は医学の領域にとどまらず、もともと豊かな人間性と高い倫理性が必要な領域でもあります。本学が高度な研究ができる大学としてさらに発展していくために、少しでも貢献できればと考えております。よろしくお願い致します。

新風

new phase

平成 28 年 10 月 1 日付けで
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。



形成外科・創傷再生学
教授

秋田 定伯

はじめまして、形成外科・創傷再生学講座の秋田定伯です。2016年10月1日から正式に福岡大学医学部 形成外科・創傷再生講座が、形成外科学講座の寄付連携講座として設立され、着任しました。

関わっていただきました皆様はこの場をお借りして感謝申し上げます。実は高校までは福岡市内の筑紫丘高校で、生まれも育ちも福岡市であり、一度も福岡市から離れて生活したことはありませんでしたが、33年ぶりに福岡市で生活を再開しております。

大学、卒後はほぼ長崎大学医学部とその関連病院、長崎大学病院で教員をしました。1993年～96年まではLos Angelesのシーダース・サイナイ病院で発生形態学、内分泌学を研究しておりました事が、現在の形成外科研究、特にサイトカイン研究や創傷治癒・再生学の基盤となりました。これまでに大学、留学、卒後研修、卒後教員生活と実にさまざまな皆様のお力添えとお支えに感謝しております。福岡大学でも新たな皆様との出会いとご縁があることと思います。精一杯、大学と医学教育、患者さん、研究発展のために尽くしたいと思っております。何卒ご指導賜りますと幸甚でございます。



感染制御部
教授

高田 徹

平成28年10月1日付けで福岡大学病院感染制御部教授を拝命致しました。幼少期は福岡市東区で過ごし、福大病院の前身である九電病院にも通院歴があります。1987年に岡山大学医学部を卒業後、九州大学第一内科に入局し、九州大学大学院細菌学教室(天児和暢教授)で学位を取得しました。1994年に福岡大学臨床検査医学講座(小野順子教授)着任後、3年間の留学生生活を挟んで田村和夫教授の下、感染症内科で感染症医として

従事し、約20年間を福岡大学でお世話になってきました。留学中は2015年にTime誌の「世界で最も影響力のある100人」にも選ばれたMartin J. Blaser教授のご指導の下、基礎研究および米国の感染症医療を幅広く学ぶ事ができました。近年、多様化する薬剤耐性菌問題、新興再興感染症等、感染症を巡る状況も年々変動がみられています。一方、脳に匹敵する重量と人体細胞の10倍に及ぶ遺伝子を保有する常在微生物(マイクロバイーム)の偏向に伴う各種疾患との関係も俄かに注目を浴びつつあります。今後は、多職種からなる中央部門の特質を生かし、各診療科と有機的な連携を深め、診療・教育・研究に一層精励致す所存です。皆様の一層のご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



消化器内科
准教授

入江 真

平成28年10月より、向坂彰太郎教授のご推挙により福岡大学病院消化器内科准教授を拝命致しました。

私は、1990年に福岡大学医学部を卒業し、一内科(奥村 恂教授)に入局致しました。1999年から3年間、糸島医師会病院にて急性・慢性肝炎、肝細胞癌および食道静脈瘤の治療を中心に循環器、呼吸器、内分泌・糖尿病、脳血管疾患などの症例を数多く経験しました。特に重症アルコール性肝炎、薬物中毒やふぐ中毒などの普段あまり遭遇しない疾患も経験しました。2001年に現在の福岡大学消化器内科(向坂彰太郎教授)に戻ってまいりました。臨床研究としては、主に非アルコール性脂肪性肝炎の治療に関する研究をしています。現在、実臨床では、肝疾患全般の診療および治療に携わっています。臨床教育では、若手医師の臨床研究の指導を行っています。また、医学部生には、福岡大学病院の魅力を伝え母校に残るよう力を入れています。今後も、福岡大学医学部および病院の発展に貢献できるよう努力して参りたいと思います。今後とも指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



消化器内科
講師

竹田津 英稔

平成28年10月より向坂 彰太郎教授の御推挙により福岡大学消化器内科講師を拝命いたしました。平成8年に佐賀大学医学部を卒業し、同年4月より虎の門病院で2年間の初期

研修を行った後、平成10年4月地元の久留米大学消化器内科に入局いたしました。久留米大学にて消化器全般を学び、関連病院にて消化器および内科疾患、地域医療について勉強させていただきました。また、平成10年10月ボストンのMassachusetts General Hospital, Immunopathology Unit、平成18年4月よりロサンゼルス の Cedars-Sinai Medical Center, inflammatory bowel disease center に各2年間ずつ、2度の米国留学をさせていただきました。平成20年以降は久留米大学で炎症性腸疾患を中心に臨床と研究を両立し行っておりまいた。最近の研究テーマは炎症性腸疾患の診断に有用な血清マーカーの探索、ドラッグデリバリーシステムを利用したアンチセンスによる新規治療の開発、細菌と炎症性腸疾患の関連、炎症性腸疾患診断・治療の地域連携ネットワークの構築などを主に取り組んでおります。

福岡大学に勤務し数カ月程度ですが、非常によい医療環境の中、医師、スタッフともに協力的で医療に対する熱意を感じています。消化管研究主任として、消化管疾患の専門性を高めていくだけでなく、近隣の先生方との地域連携を含め、より良い医療体制を築いていきたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。



消化器外科
講師

吉村 文博

平成28年4月1日より福岡大学 消化器外科学 上部消化管（食道・胃）外科を担当しております吉村文博と申します。平成28年10月付けで長谷川傑教授のご推挙により同外科学の講師を拝命いたしました。

私は平成12年に久留米大学医学部を卒業いたしました。その後、市中病院で外科医として修練している中で、内視鏡外科手術の術後回復の速さや、開腹手術を凌駕する手術の精緻さに魅了され、これを極めたいとの思いが強く、平成20年に藤田保健衛生大学病院 上部消化管外科 宇山一朗教授の門を叩き入局させていただきました。宇山一朗先生は世界で初めての腹腔鏡下胃全摘術執刀医、ロボット支援下手術ダヴィンチの導入、また王貞治氏や多数の著名人の執刀医としても有名であります。そこでの経験を生かして現在当科では全症例に内視鏡外科手術を行っており、今後はロボット手術の導入も予定しております。

これからも、福岡大学病院を頼って来られる患者さんへ安全で確実な内視鏡外科手術を提供するとともに、若手の先生になるべく多くの刺激と機会を与えることができるよう日々精励いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

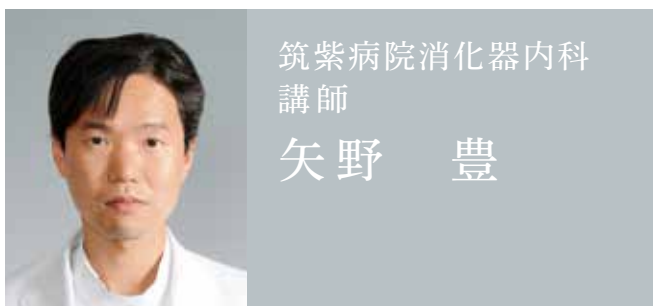


筑紫病院内視鏡部
講師

長浜 孝

私は平成6年に福岡大学を卒業後、平成28年9月まで福岡大学筑紫病院消化器内科に所属していました。この度、当科に八尾建史教授が内視鏡部を開設され、内視鏡部講師に拝命頂きました。

近年、消化器領域における内視鏡診断と治療の進歩は著しく、我々も新知見とエビデンスを世界に向けて発信し、さらに臨床で実践してきました。その結果、難病や癌など、診療難度の高い患者が国内外より多数紹介受診され、臨床医としても大きな経験を積むことが出来ました。今後はこの様な恵まれた環境の中で、八尾教授、後輩スタッフと共に、診療はもちろん、研究と教育に尽力したいと思っています。消化器疾患に関するご相談、内視鏡現場の見学や入局希望などありましたら何時でも御連絡下さい。



筑紫病院消化器内科
講師

矢野 豊

平成28年10月より植木敏晴教授のご推挙により福岡大学筑紫病院消化器内科の講師を拝命いたしました矢野豊と申します。

私は福岡県糸島市出身で、平成13年に福岡大学医学部を卒業し、当時八尾恒良教授が主宰されていた福岡大学筑紫病院消化器科に入局致しました。その後、平成18年から約3年間、櫻井敏弘先生が院長として赴任されていた町立芦屋中央病院で勤務いたしました。芦屋中央病院に出向中の際も、松井敏幸教授に御指導いただきクローン病の腸癌合併リスクに関する研究で学位を取得させていただきました。

平成21年に筑紫病院消化器科に帰ってきてからは、主に炎症性腸疾患（IBD）の診療や小腸疾患の診断、臨床研究に携わり、全国学会の主題演題や国際学会での発表など多くの貴重な機会をいただいております。IBDは、若年で発症することが多く、近年も増加傾向にある難治性疾患です。病因は現在もお不明であり根本的な治療はありませんが、病態の解明が進んだことで治療は進歩しています。当科は諸先輩方が築いてきた日々の診療の積み重ねがあって、日本有数のIBD症例数を誇ります。さら

に、平成24年より福岡大学筑紫病院炎症性腸疾患（IBD）センターが開設され、松井敏幸教授、平井郁仁診療教授を筆頭に多くの医局員と共に、IBDの診療・研究を行っています。また、当センターでは年1回IBD市民公開講座を開催し、IBDの情報を発信しています。そのためか、さらに患者数は右肩上がりに増加しております。今後も多くの患者さんのために、今まで培ってきた技術を磨き、さらなる新たな知見を発信できるよう日々精進していきたいと考えております。今後とも同窓会ならびに福岡大学医学会の諸先輩方にはご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。



筑紫病院小児科
講師

吉兼 由佳子

この度、福岡大学筑紫病院小児科の講師を拝命致しました。私は平成2年に宮崎県都城市立西高等学校を卒業後、福岡大学医学部に入学し、平成8年に卒業、福岡大学小児

科に入局しました。平成12年からの2年間は、福岡市立こども病院循環器科で小児循環器レジデントとして、先天性心疾患を中心に診療してまいりました。平成18年より福岡大学医学部小児科学教室のスタッフとして従事し、福岡大学病院や筑紫病院において、一般診療および小児循環器疾患の診療に当たっております。小児と申しましても胎児期のうちから超音波検査で先天性心疾患を診断し、産婦人科の先生方と協力して方針を立てることもあります。またとりわけ小児に好発する原因不明の全身血管炎である川崎病の患者さんを多く診させていただく機会が多く、その臨床研究はもとより、科研費を取得し、川崎病モデルマウスを用いた基礎研究もさせて頂いており、平成24年に論文提出による学位を取得させて頂きました。私は臨床医であり、基礎研究に関してはゼロからのスタートだったため、筑紫病院病理部の原岡先生や薬学部の先生、他大学の先生方に多大なご協力を頂いております。この場を借りて先生方に厚く御礼申し上げます。また教育面では、特に4年生の授業で、先天性心疾患の血行動態を板書で解説しており、学生さんたちも寝る暇なく熱心にノートをとってくれています。これからも微力ながら、臨床・研究・教育面における更なる発展に貢献できるよう努めて参ります。諸先輩方には今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

福岡大学医学会第75回例会報告

■日時／平成29年2月23日（木）18：00～19：00 ■場所／医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事 小玉 正太

- 1) **開会の辞** 集会幹事 小玉 正太
- 2) **会長挨拶** 医学部長 朔 啓二郎
- 3) **新任講演** 座長…朔 啓二郎 [講演 25 分, 質疑応答 5 分]

講演者…高松 泰（腫瘍・血液・感染症内科学 教授）
「がんに対する薬物療法の進歩」

4) **福岡大学医学紀要43巻優秀論文賞授与式**

受賞者：村上 健（耳鼻咽喉科）
渡邊 徳人（整形外科）

5) **受賞論文の要旨講演** [講演 10 分（質疑応答含む）]

講演者…村上 健 座長…末田 尚之

「Classification of Noise and Environmental Stimuli by the Auditory Impression of Cochlear Implant Users」

講演者…渡邊 徳人 座長…吉村 一郎

「Second-look Arthroscopic Findings after Periacetabular Osteotomy in Patients with Acetabular Dysplasia」

6) **閉会の辞** 集会幹事 小玉 正太



講演された先生方を囲んで
（左から高松先生、吉村先生、渡邊先生、朔医学会会長、村上先生、末田先生、小玉先生）

教室だより
Letter from a classroom

看護学科 [基礎看護学・母子看護学]

[基礎看護学]

基礎看護学は、看護学の基盤となる学問領域で、教員6名で担当しています。看護や看護学について考える土台を形成し、看護を実践する基礎的な能力を身につけることを目的としています。看護の場や対象が違って、どのような状況にも適応できる核となる知識や技術を学ぶ分野と位置づけ教育、研究を行っています。

教育

看護学の入り口として、人間、環境、健康、看護について系統的、学問的に学べるよう組み立てています。人間の生活と環境や社会の変化を踏まえ、健康上の問題を解決するために必要な看護技術の習得は基礎看護学の重要課題です。教員は対面授業で考え方やモデルを示しつつ、自学自習を促進して、確固たる知識・技術を身につけられるよう支援しています。また、学習支援システム(Moodle)を活用した双方向の学習や、シミュレーション学習など、多様な学習活動を通して深く学べるようにしています。講義・演習での学びを臨地実習で活かす体験を通して看護実践能力へと発展させることを目指しています。

研究

基礎看護学分野では、人間の生活そのものに関わるテーマを取り上げ研究に取り組んでいます。看護ケアの質の向上を図る上で重要なことは、看護の科学性を追及し新たな知見を得て、看護実践に活かすことです。人間の生活を支える諸理論や看護ケアを検証し、健康の保持・増進・回復に役立つよう援助する看護のあり方を探求しています。

[母子看護学]

教育

母子看護学分野は、母性看護学3名と小児看護学1名の教員で担当しています。看護学科2年次から3年次生を対象に母性看護学4科目(6単位)、小児看護学4科目(6単位)の教育を行っています。生涯発達の視点から、こどもや女性の発達および健康を促進する看護を学べるように、協同学習・ディベート・演習などにより、学生が自分の意見を持ち積極的に参加できる場を設ける工夫をしています。また、赤ちゃん先生(1か月児から3歳児)とのふれあい・新生児の視聴覚教材を用いた体験学習を取り入れ臨地実習を進めています。臨地実習では、学生が妊産婦や患児と時間や場を共有する直接的な経験を大切にしています。その経験のなかで、多様性に気づき、それを教材として看護の判断力、問題解決のための実践力を学ぶことができるといえます。妊産婦の看護、小児・家族との関係形成、小児の安全、新生児の沐浴や授乳、外来における妊産婦のエスコートなどを中心に指導しています。

研究

子育て期の母親の孤立を防ぎ、こどもの健やかな成長を目的として、生まれる前から切れ目のない支援体制の構築に関する研究に取り組んでいます。2016年12月より総合周産期母子医療センター産科部門と協働し、家庭や地域の子育て力の強化のために、母親学級・両親学級・祖父母学級を開始いたしました。



教室だよ
Letter from a classroom



看護学科 [成人看護学・精神看護学]

教育

[成人看護学]

成人看護学はライフステージの中でも中核を成す『成人期』についての理解を深め、健康問題に対する看護の方法、患者教育そして健康維持・増進について教授しています。成人看護学の科目は、1年・2年次の「成人看護学概論」「急性期の成人看護」「慢性期の成人看護」3年次の「終末期の成人看護」、実習は「成人看護学実習Ⅰ（急性期実習）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・終末期実習）」「総合実習」で構成されています。

現代は、疾病構造の変化、保健医療政策の変革などにより、看護職の専門性がより重要視される時代です。そこで、成人看護学領域ではシミュレーション教育を積極的に取り入れ、学生の看護実践能力と主体的に学ぶ態度の育成を教員一丸となってサポートしています。

また、大学院教育において、将来、専門看護師を希望する院生には「急性・重症患者看護」分野で活躍ができるように、高度実践看護師コースに「クリティカルケア看護分野」を開設し、高度な実践、コンサルテーション、倫理的調整および教育支援、研究能力が獲得できるよう支援していきます。

[精神看護学]

精神看護学領域は、2名の教員で1年生から4年生までの教育活動を行っています。1年生では「人間関係論」で援助の人間関係の理解を目指しています。そして、「精神看護学概論」で精神看護の対象、目的と社会での役割を考えていきます。2年生になると「こころの健康と看護」で精神保健について、3年生では「こころの病と看護」において、精神障がいをもつ人の支援について学んでいます。3、4年生では領域実習と総合実習において精神医療の現場でチーム医療における看護に取り組んでいます。

研究

[成人看護学]

成人看護学の教員は、教授1名、准教授3名、講師2名、助教1名の計7名です。それぞれの教員は豊かな臨床・教育経験を持ち、独自の研究課題に取り組んでいます。

他大学との共同研究にも積極的に取り組み、研究成果は国内だけでなく、多くの国際学会で発表し、評価されています。また、シミュレーション教育や高度実践看護師の教育のための海外研修にも参加し、教育・研究の充実に力を注いでいます。

[精神看護学]

科研費では、発達障がいをもつ人の支援にあたる訪問看護師への教育、子どもをもつ看護士の育児ストレスに関する研究を行っています。その他、他大学との共同研究として乳がん患者の意思決定、二交代制夜勤看護師のメンタルヘルスがあります。精神医療の現場から看護師のメンタルヘルスまで幅広い研究を実施し、健康支援に貢献することを目指しています。



祝 福岡大学医学紀要第43巻 優秀論文賞

村上 健 (耳鼻咽喉科)

「Classification of Noise and Environmental Stimuli by the Auditory Impression of Cochlear Implant Users」

渡邊 徳人 (整形外科)

「Second-look Arthroscopic Findings after Periacetabular Osteotomy in Patients with Acetabular Dysplasia」

教室だより
Letter from a classroom



福岡大学

博多駅クリニック

博多駅クリニックは2016年4月21日に開院しました。循環器内科、形成外科、脳神経外科の3人の医師が常勤し、専門外来と女性外来には福大病院や筑紫病院の先生方に来て頂いています。商業施設内にある当クリニックは女性の患者さんが多く、産婦人科や乳腺外科の先生方には大変お世話になっています。

昨年9月に前任の先生を引き継いだ形成外科の西田先生は美容医療の経験も豊富で患者さんからは厚い信頼を得ています。今年の1月に脳外科を引き継いだ小川先生の活躍も期待されます。循環器内科は昨年末からホルター心電図検査が行えるようになり、また、超音波検査ができる技師さんも赴任し、一般内科も含め少しずつ充実した診療ができる体制が整いつつあります。

開院当初は予想外に患者数が少なく、まず「知ってもらうこと」を第一と考え、クリニックや博多バスターミナル9Fで「知って得する健康セミナー」と題し市民公開講座を毎月1回開催、また、博多駅構内のマイング広場ではクリニックの旗を立て「健康

チェック」を行うなど、まさに広報・情宣活動の1年でした。

両病院と異なり施行できる検査は限られ入院施設もなく、専門外の患者の事を相談できる先生方も居ず、大学病院を羨ましく思う日々ですが、大学の施設として外来診療等の教育施設なれる日を夢み、職員一丸となって診療に励んでいます。



第43回 医学部慰霊祭



第四十三回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十八年十月十五日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された四十一柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた二十柱、合わせて六十一柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、朔啓二郎医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて六十一柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。

学位取得

次の方は、福岡大学より博士(医学)を授与されました。

課程修了による
学位取得者
[平成28年9月13日]

- 吉田 祐土 (生体制御系専攻)
- 金城 健 (病態構造系専攻)
- 大津 健聖 (病態構造系専攻)
- 立川 量子 (先端医療科学系専攻)

- 内藤 淑子 (先端医療科学系専攻)
- 井原 由紀子 (先端医療科学系専攻)
- 宮原 大輔 (先端医療科学系専攻)

論文提出による
学位取得者
[平成28年9月27日]

- 坂 暁子 (クリスタルビルクリニック)
- 大谷 圭介 (朝倉健生病院消化器内科)
- 藤岡 伸助 (神経内科・健康管理科 助教)

- 藤光 律子 (放射線医学 助教)
- 古賀 文二 (皮膚科 講師 4条7号)
- 山田 和之介 (消化器外科 助手)